

私の独り言

世界に誇ろう、日本女性 ―平安時代の才女たち―（後半）

大阪大学名誉教授

長谷川 晃

はじめに

前回と今回で日本の平安女性の生き様を例にとり、「日本女性の社会進出が遅れていて、いまだに欧米から日本には性差別があると思われる」と言う批判は極めてお門違いだと言う話をすることにした。近年こうした欧米の批判を背景に、安倍政権は女性の管理職登用を呼びかけている。労働力不足を補う為に女性の労働力と才能を活用するのは当然のことだが、これを欧米の批判をかわす為や、労働力不足を理由に始めるのは極めてご都合主義で、女性に対して失礼ではないか。安倍首相はむしろ女性たちに「日本の経済危機を救う為に、助けて下さい」と懇願すべきだと思っている。そして、どうすれば協力が得られるかを調査すべきだと思っている。私は今も子供たちが学校から「お母ちゃん、ただいま!」と言って戻ってくる子供を「お帰り」と迎えてやりたいと思う女性が多いのではないかと考えている。彼女たちにその希望を叶え、なお、社会で働いてもらう為には管理職の枠を規定することより、例えば、子供が帰宅する頃に家に帰って仕事が続けられるようにインターネットやパソコンを用意する等の地道な支援が必要なのではないだろうか？長い目で見た日本の将来を考える時に、健全な子育ては欠かせない。これを重視する女性に働いてもらって、尚かつその希望を叶える仕組みを考えるのが政治家の責務だろう。

日本女性には子育ても仕事もうまくこなせる伝統がある。このことを証明する為に、日本女性の実力を平安女性の例で見ていただきたい。ここで紹介する4名の平安女性たちは、まさに子育てをしながら、素晴らしい社会的業績を残した人達だ。彼女たちが生きた10世紀から11世紀にかけての時代には女性解放の先駆者を自負する米国はその国すら存在してなかったし、欧州でも当時の女性は100パーセント文盲で、たまたま才能のある女性が現れると魔女扱いにされ、火

あぶりの刑にあったものだ。ギリシャ神話時代には優れた女神が活躍するが、男性一神教のユダヤ・キリスト教文明が世界を支配する時代に入ると女性差別の風潮が2千年の長きにわたって世界を支配するようになる。しかし、神話時代から母性文化を維持する日本ではこの洗礼を受けず、どの時代にも女性たちは陰に日向に日本を支えて来ていることを日本人男性は自負し、世界に発信すべきだと思っている。

この稿では特に私が血液型をA型と推定する紫式部、B型と推定する和泉式部、O型と推定する赤染衛門、AB型と推定する清少納言を例に取り、全く性格の異なる彼女たちが千年も前の日本社会でどのように生きたかを紹介し、これをベースに欧米からの根拠ない批判に対する反論の材料としていただきたいと思います。前回では自ずからの才能を思う存分発揮した清少納言と、世間の批判をかわしながら和歌と恋に生きた和泉式部の生き方を紹介した。今回は才能をひた隠しにしたご存知紫式部と良妻賢母の鏡とされるまじめ女性の赤染衛門に焦点を当ててみよう。

2.3 まじめ女性赤染衛門

－赤染衛門のプロフィール－

大江匡衡（おおえのまさひら）の妻。生まれは960年頃、八十歳くらいまで生きたと考えられている。道長の室の源倫子と娘の彰子に宮仕えし、そこで和泉式部、紫式部らとも知り合う。人柄がよく、当時の歌の流れを代表している傑人である。

－百人一首の歌－

「やすらはで寝なましものを小夜ふけて傾ぶくまでの月を見しかな」

後拾遺集恋の部「中関白、少将に侍りけるとき、はらからなる人に物いいわたり侍りける（その友人に言付けた）。たのめてござりけるつとめて（来なかった

ので翌朝)、女にかわりてよめる」という前書きがある。この歌は藤原道隆が蔵人の少将だった頃、赤染衛門の姉妹の一人のもとに通ったのであろう。その頃妹の前に現れなかったことを恨んで妹に代わって詠んだ歌である。私はこの歌を初めて読んだ時、衛門もなかなかの恋の歌を詠むなと思ったのだが、この前書きを知ってやはり衛門らしいなと思った次第である。この歌はおそらく衛門が二十歳前後のものと考えられる。歌の意味はゆっくり安らかに寝たいと思っていたのにあなたが来ないので、傾く月を見る頃まで起きておりました。という恨みを込めたもので男の気休めの言葉を恨んで詠んでやったものである。

清少納言、紫式部、和泉式部と個性の強い平安女性の中で最も人から慕われたのがまじめ才女のO型女性、赤染衛門だ。宇多天皇から堀川天皇の時代に及ぶ皇族や上流社会の事件や行事を物語風に書き綴った「栄華物語」全四十巻のうち正編三十巻の作者といわれている赤染衛門は、前に紹介したとおり、和泉式部の友人であり、紫式部らとともに中宮彰子に仕えた女房の一人だ。栄華物語のなかでは、彰子の父の道長のことを、胡麻をすって立派に書き上げていることからもわかるとおり、もし男性であったなら大変世渡りの上手な人間であったろうと思われる。彼女は大江為基など二、三のボーイフレンドがいたらしいが、文章博士である大江匡衡と結婚してからは良妻賢母で通したとされている。結婚後には文章博士の夫に知恵をさずけたり、一人息子の挙周（たかちか）を道長の娘の倫子に歌を奉って引き立てを頼んだり、息子や娘が恋人に贈る歌の代筆などもまめやかにしたらしい。その一方で、友人の和泉式部にはあまり色好みしないようにと、「うつろはで、しばししのだの森をみよ、かへりもぞするくずのうら風」という忠告の歌を贈ったりもしている。他の女性に対して何かにつけ批判的な紫式部もその日記のなかで赤衛門に対しては、消極的ではあるが、「まことにゆゑゆゑしく（風格があり）」と、その歌人としての才をほめている。

赤染衛門と前回紹介した和泉式部の関係、彼女の和泉式部に対する見方、赤染衛門が優れた歴史家と言われる事実等を見ていただく為に、栄華物語から和泉式部にまつわる文を紹介しておこう。まずは為尊親王の死にまつわるものだ。

巻第七の三一為尊親王薨去

弾正宮（だんじやうのみや）うちはへ（引き続いて）御夜歩（よあり）きの恐ろしさを、世の人やすからず、あいなきことなりと、さかしらに聞えさせつる（世間では穏やかでなく、不都合なものと差し出がましくお噂していたが）、今年はおほかたいと騒がしう（およそ世の中が騒然としており）、いつぞやの心地して（何時ものような気持ちで）、道大路（みちおほじ）のいみじきに（惨憺たる有様で）、ものどもを見過ぐしつつあさましかりつる御夜歩きのしるしにや（そうしたあれこれのものに目もくれず夜歩きなさったせいだろうか）、いみじうわづらはせたまひて、うせたまひぬ（ひどく思われてお亡くなりになった）。このほどは新中納言、和泉式部などに思（おぼ）しつきて（ご執心で）、あさましきまで（余りにも情けなく）おはしましつる御心ばへを、憂（う）きものに思しつれど、上（うへ）（藤原伊尹女）はあはれに思し嘆きて、四十九日のほどに尼になりたまひぬ。もとよりいみじう道心（信心深い）おはして、二三千部の経を読み過ぐさせたまへれば、世のはかなさも思い知られて、いとどしき御おこなひなり（なおいっそうの御修業をなさった）。かくて弾正宮うせさせたまひぬといふこと、冷泉院（れいぜいのゐん）ほの聞しめして（それとなくお聞きになって）、「よにうせじ。よう求めばありなんものを（亡くなったのではあるまい、よく探してみたら何処ぞにいるだろう）」とぞのたまはせける。あはれなる親の御有様（ありさま）になん。東宮もいみじう思し嘆く。帥宮（弾正宮の弟）もいみじうあはれに口惜（くちを）しきことに思し嘆くべし。さるは今年ぞ二十五にならせたまひける（実際、宮はことし二十五歳になっておられた）。花山院ぞ、なかにもとりわき何ごともあつかひきこえたまひける（御兄花山院が特にご葬儀の万端のお世話もうしあげているのだ）。

次は和泉式部と帥の宮との派手な賀茂の祭の模様を記したものである。この文で先回に記した和泉式部日記にあらわれる弾正宮と帥宮の関係がわかる。

巻第八の一二 花山院と敦道親王の加茂祭見物

今年はこの使のひびきにて、（この使いが大評判となって）帥宮（そちのみや）、花山院など、わざと御車したてて物を御覧じ、御棧敷（さじき）の前あまた

たび渡らせたまふ（何度もお通りになる）。帥宮の御車の後（しり）には、和泉を乗せさせたまへり。花山院の御車は金の漆などいふやうに塗らせたまへり。網代（あじろ）の御車をすべてえもいはず（いいようもなく）造らせたまへり。さはかりもすべかりけりと見えたり（まさにこんなふうにしてすべきものだとおもわれるようだ）。御供に大童子（だいどうじ）の大きやかに年ねびたる（大柄で年配の）四十人、中童子二十人、召次（めしつぎ）ばら、もとの俗ども（もとのままの俗体のものども）仕うまつれり。御車の後に殿上人（てんじやうびと）引き連れて、色々さまざまにて（様々の衣装で）、赤き扇（あふぎ）をひろめかし使ひて、御棧敷の前あまたたび渡り歩かせたまふほど、ただの年ならばかからでもなど、殿見たてまつらせたまひつべけれど（普通の年であったならこうまでこうまで派手になさらくともなどと殿（道長）はきっとお見上げ申されるに違いないところだが）、使（つかひ）の君の御ものの榮（は）えに思ほされて（使いの君が引き立ってお見えになることとお思いになって）、上達部（かむだちめ）うち微笑み、殿の御前（おまへ）、「なほ気色（けしき）おはします院なりかしな（やはり一趣向おあり遊ばず院でいらしゃること）。この男の使に立つ年『われこそ見はやさめ』とのたまはすと聞きしもしるく（この子が祭りの使に立つ年には、「ご自身が花を添えてやろう」おうせられたと聞いたが）、ゆくりかにも出でたまへるかな（その通り思いがけずおでましくださったものよ）」と、みな興（きょう）じきこえたまふ（興あることと拝聴しておられる）。

和泉式部と帥宮の関係や平安時代の人々の様子が目に浮かぶように描かれているではないか。

2.4 紫式部と源氏物語

－紫式部のプロフィール－

本名は不明。一条中宮彰子に仕え、藤式部と呼ばれる。父為時が式部丞となったことから式部を取り物語の紫から後に人が紫式部と呼ぶようになる。970年頃生まれ1031年頃没したと考えられている。父為時から学問を得、四十歳半ばの頃に山城守藤原宣高（のぶたか）と結婚、宣高との間に娘賢子が生まれるが夫は間もなく死去。この悲しみの中から理想の男性源氏を生み出したとみられている。

－百人一首の歌－

「めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かげ」

新古今集雑の部「はやくよりわらはともだちに侍りける人の、としごろへてゆき逢ひたる、ほのかにて七月十日頃月にきほひてかへり侍りければ」という前置きがある。昔の面ざしをようやく見分けるか見分けない内にそそくさと帰って行ったその友だちのことを月に託して詠んでいる。相手が男であるか女であるかは分からないが、これは恋の歌ではないから、男とも限らない。前書きの日付けと合わせると七夕の余情が込められている。久しぶりにあった幼友達がおしゃべりに時を過ごし、気が付いてあわてて帰って行った経過と取り残された人の味気なさを歌ったものと解釈されている。これも前置きがなければ恋人とのデートののかなさを恨んで歌ったようにみえるがそうではない。

私はこの文を書くにあたり、もう一度源氏物語を読み直してみた。そして近ごろになく感動した。この一卷で日本人に創造性がないという批判は覆されるし、またこの一卷で日本女性の偉大な力が実証されている。物理学者の目で見るとくに感心させられるのは、平安女性のきめの細やかさ、情緒の深さ、とその表現力といった文学的な作者の力量の裏にある緻密さと壮大な構成能力が見受けられることだ。源氏の誕生から五十幾歳での死、その後、戸籍上の息子の薫が二八歳になるまでの七十余年にわたる膨大な話を、複雑な人間関係と係累、登場人物の性格にいささかの矛盾もなく書き上げている力量は、紫式部が科学者としての才能も十分持ち合わせていることをあらわしている。それだけではない。格式や作法がきびしく決まっている貴族社会での、言葉づかいから各クラスの人間関係の記述がこの決まりからはみ出さないよう細心の努力が見られ、この点現代の作家には要求されない注意深さが必要であったであろう。それにもかかわらず源氏が義理の母に当る中宮に子供を生ませるなど、信じられないほどの大胆なストーリーをつくり上げている。

源氏物語は複数の作者によるものという説もある。物語の現代訳をしている与謝野晶子もこの説をとっている。たしかに言われてみると、源氏が老いはじめる「若菜」の節から、急に文体が変わる。歌が出てなくなり、物語がメロドラマ的になる。文章もそういわ

れれば幼稚になっている。与謝野晶子は、後篇は式部の娘の大式三位（だいにのさんみ）の作と言っている。その証拠として「若菜」の初めからの文の組立の変化と、「竹河」の巻にある「紫のゆかりこよなきには似見ざめれど」と書いてあるのが、紫式部の筆の跡には及ばないがと解釈されることを挙げている。

しかし後半の中心となる「宇治十帖」はじつに素晴らしいものだ。前半の源氏を中心とした「女の目」から見た理想的男性の見方から一転し、ここでは女性の心理描写が中心となり、男性は補佐的な役になっている。「宇治十帖」の文は、物語の前半のものに非常によく似ている。源氏物語の前半を描いた作者なら、角度を変えてもう一つの作品を生み出してやろうと考え、別の見方でこの箇所を書いたとしても不自然ではないとも考えられる。やはり、ここは紫式部の書いたものではないだろうか。娘の大式三位も、母と同様彰子に仕えた才女で、百人一首に「ありま山いな篠原風吹ばいでそよ人をわすれやはする」の歌がある。もし後半が娘の作であるとするならば、たいへんな才女が二人いたことになり、これもおもしろい。赤染衛門、和泉式部の例に漏れず、紫式部も立派に子育てをしていることが分かる。こんなことを推量しながら読むのも楽しみの一つだ。源氏の死ぬ「雲隠れ」の巻は、巻のタイトルだけがあり、中味がないのは素晴らしい。これこそ母性社会の哲学である「無」を積極的に使ったものではないだろうか。物語の中で、仏教、中国文学、それに孔子の話は出てくるが、『老子』の話は出てこない。それにも拘わらず日本古来の考え方にマッチする仏教の空や老子の無が各所に表れている。

物語のなかで感銘を受けるところは数え切れない。「帚木」の巻の最初に源氏のプロフィールを紹介し、彼は世間でいうような好色な男性でなく、質素な心を持つ人だとことわっている。このことは、物語が源氏の女性遍歴を中心に書かれていることと矛盾するようだが決してそうではない。「真木柱」のなかで「好色な男はみずから求めて苦しみをするものである」と筆者が書いているように、源氏は苦勞を承知で興味のわく女性に強いて近づき、そのたびに真剣に愛している。いいかげんな恋をしてない。理想の女性を追い続けたドンファンではない。追い続けているようではあるが、そのたびにその女性を人間として大事にしている。イデオロギーになじまない母性社会のなかで、私

はここに一つのイデオロギーを見ることができる。源氏は非常に自由な心もち、自分が求めた女性は、醜女（末摘花）であっても、身分が違って（明石）平等に愛し世話をしている。また源氏は、自分の唯一人の息子夕霧を親の七光を利用して出世させず、地道に苦勞させ、勉強して自力で出世させている。私はここにリベラリズムと平等の精神、社会に対する責任感など、現代の父性社会のイデオロギーにつながるものを限られた枠の中ではあるが見出すことができる。母性社会のなかでの自由とか、平等といった考え方は、源氏の女性に対する態度に既に存在する。紫式部が源氏を理想的な男性として描いているのは、彼の美貌、文学や音楽の才能以外にこういった彼の生き方を通じた近代的なものの見方にも通じるものを紹介したかったのではないだろうか。こうした考えが千年も前に日本女性の中に存在していたのは正におどろくべきことで先進国ぶる欧米の人達に誇ってほしい。自由や平等の精神は、何もアメリカのような父性社会が独占するものではない。人間の本質に基づく自然なのだ。

源氏物語は、全体の壮大な構成もさることながら、各所にそこだけを取り出してきても非常に興味深い記述が見られる。「帚木」のなかで、男たちが品定めをしている有名な場面は、まるでいまの男性が書いたのではないかと思うほど男から見た女性のことがよく書かれている。「須磨」の巻で「源氏の恩」になっていない人は一人もいないのに、源氏を左遷した政府の力を恐れて誰一人訪ねてこないことを源氏が嘆く場面など、いまの政治の世界と変わらない。

源氏の女性観というものが各所に出てくる。「滯標」の巻で、恋人の相手はおもしろさがなければいけないという。また「初音」では娘の教育において、一つのことに熱中して専門家にさせるよりも、少しは芸などもでき、そのうえ思想的に確かな人に育てたいという。また「螢」では、紫式部は、源氏の口をかりて小説というものについて書いている。達観という他はない。日本女性が千年も前に素晴らしい小説を書いたという事実以上に、その中の各所に現れる日本女性紫式部の哲学は素晴らしいものだ。これに比べ、近世までの西洋の歴史のなかで女性が活躍したのは、15世紀のジャンヌ・ダルクぐらいだが、彼女は文盲で自分の名前すら書けなかった。その上、男神を信仰するキリスト教社会で、有能な女性は、魔女扱いにされたのに

対し、日本の神道では、巫子が神の声を伝える大事な役割をしてきたのと大きな違いだ。

源氏物語は、仏教が至るところで顔を出し、枕草子に比べじめじめしている。清少納言が坊さんをばかにしているのに比べ対照的だ。この違いは作者の性格の違いをあらわしているのだろう。この点平安時代を知るには、当時の読み物をいろいろ読み比べてみないと間違った解釈をしてしまう。

紫式部はたぶんA型の血液をもった伝統的な日本女性であったのだろう。紫式部が清少納言のことをよく言わないのは、仕えていた皇后が違っていただけではなく、A型、AB型の性格の違いからではないだろうか。

この章の最後に、これらの平安女性四人を紫式部がその日記のなかでどう描いているかを紹介しておこう。この箇所では式部から見た平安才女が大変面白く、且つ生々しく描かれており、当時の人間社会の様子が手に取るように伺える。日記からは源氏物語とは全く別な一人の人間としての紫式部像が見えてくるから面白い。

和泉式部について

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ、うちとけて文はしり書きたるに、そのかたのぞえある人、はかない言葉のにはほひも見えはべるめり。歌は、いとをかしきこと、ものおほえ、うたのことわり、まことの歌よみざまにこそはべらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしきひとふしの、目にとまるよみそへはべり。それだに、人のよみた歌、難じことわりむたらむは、いでやさまで心は得じ、口にいと歌のよまるなめりとぞ、見えたるすぢにはべるかし。はづかしげの歌よみやとはおほえはべらず。

(和泉式部という人は、とりわけ趣をそそるような手紙をやり取りした人である。けれども、和泉はときにはけしからぬことなどしたりはするが、気楽に手紙を走り書きしたときなどには、その文章に才能のある人で、ちょっとした言葉のなかにも美しさが見られる。歌は、うまく趣向を凝らすことが上手だとか、歌についての知識や理論は、本当の歌人というほどではないように思われるが、口から出るにまかせて歌ったものなどに、必ず魅力のある点が一つあり、目に止ま

るものがうまく詠み添えてある。そうであっても人の詠んだ歌を非難して批評している場合には、それほど歌の心がわかっていないのだろうと思われたりもする。実にうまく歌が口について出てくると思われる性質の歌人であるが、気はずかしくなるほど立派な歌人だとは思えない。)

いかにも紫式部らしい批評だ。当時は知的に趣向を凝らした歌が尊ばれていたため、和泉式部のような感情を率直に出す歌は主流とはみなされていなかったのかも知れない。理屈っぽい紫式部はこの点で和泉式部の歌を批評している。

赤染衛門について

丹波の守(たんばのかみ)の北の方をば、宮・殿などのわたりには、匡衡衛門(まさひらえもん)とぞいひはべる。ことにやむごとなきほどならねど、まことにゆゑゆゑしく、歌よみとて、よろづのことにつけてよみちらさねど、聞こえたるかぎりは、はかなきをりふしのことも、それこそはづかしき口つきにはべれ…

(丹波の守である大江匡衡の妻を宮中では、匡衡衛門(赤染衛門)といっている。とくに優れているというほどの歌人ではないが、たいへん風格があり、歌人とはいっても万事について詠むというわけではないが、世に知られているものは、ちょっとしたそのときどきのこともたいへん立派に歌にしている…)

清少納言について

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、まな書きちらしてはべるほど、よく見れば、まだいとたらぬことおほかり。かく、人にことならむと思ひこのめる人はかならず見劣りし、行くすゑうたてのみはべれば、艶になりぬるは、いとすごうすずろなるをりも、もののあはれにすすみ、をかしきことも見過ぐさぬほどに、おのづから、さるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人の果て、いかでかはよくはべらむ。

(清少納言こそは得意顔をして厚顔しく立ち振舞いする人だ。あれほどかしこぶり、漢字などを書き散らしているように見えても、よく見るとまだ不十分なことが多い。このように人と違った特徴を出すことを心掛けようとしている人は、必ず見劣りし、将来は悪くなっていくばかりだ。風流を気取るようになった人

は、ひどく殺風景で何でもないようなときでも、しみり感動しているように振舞い、趣のあることも見逃さないようにしていると、おのずから見当外れで、軽薄なことになってしまう。その軽薄のなりの果てはどうして良いことがあるであろうか。)

紫式部の清少納言に対する批判は手厳しい。一つは、清少納言の仕える皇后定子、紫式部の仕える中宮彰子との間の対抗意識があったからだろうが、性格的に見ても自分の才能を隠そうとしない清少納言を紫式部は苦々しく思っていたにちがいない。何でもないことをいかにも感動しているように書くというのは、まさに枕草子のことをいっているのでしょう。

紫式部自身について

それ、心よりほかのわが面影をばつと見れど、えさらずさし向かひ、まじりゐたることだにあり。しかじかさへもどかれしと、はづかしきにはあらねど、むつかしと思ひて、ほけ痴れたる人にとどなり果ててはべれば、「かうは推(お)しはからざりき。いと艶に、はづかしく、人見えにくげに、そばそばしきさまして、物語このみ、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに見おとさむものとなむ、みな人々いひ思ひつつにくしみを、見るには、あやしきまでおいらかに、こと人かとなむおほゆる」とぞ、みないひはべるに、はづかしく、人にかうおいらけものと見おとされにけるとは思ひはべれど、ただこれぞわが心と、ならひもてなしはべるありさま、宮の御前も、「いとうちとけては見えじとなむ思ひしかど、人よりけにむつまじうなりにたるこそ」と、のたまはするをりをりはべり…

(式部は宮仕えをする前から源氏物語で有名になっていたの、宮仕の後には、それについて本心を隠した私の顔を人はじっと見るけれども、仕方がないから差し向かってみんなと一緒に座していることもある。かくかくと具体的に非難されて恥ずかしいわけではないが、弁護するのも面倒だと思って、ボケツとしたふりをしてしていると、「こんな人とは想像しなかった、とても気取って立派で、近づきにくいように、よそよそしい様子をして物語が好きで、風流ぶってよく歌を詠んだり、人を人と思わず、憎らしいほど人を軽蔑するような女だと人々が思って憎んでいたようだが、会ってみると、不思議なぐらいおっとりしていて別人かと思われる」などと、みながいうのは恥ずかしく、人に

おっとりした者だと見られていたのだと思うが、これこそが私の本性なのだと、振舞い慣れている私の有様を宮のおん前<中宮の>も「本当に打ちとけて付き合えないだろうと思っていたのに、他の人よりずっと親しくなってしまったのは、不思議だ」とおっしゃることがあった。)と少々嫌らしい文章が綿々と続く。日記を読むと源氏物語では想像もできない式部の性格がよく見えてくる。同時に当時の宮殿内の人間関係がうかがえる。こんな中で和泉式部はぬらりくらの我が道を行き、清少納言は恥じることもなく才能を表に現して生きていたのは極めて興味深く、日本女性の才気と芯の強さが見えてくるのではないか。

結言

平安時代の女性の活躍ぶりを見ると、この頃から既に日本女性が解放され、一人一人の個性に基づいた生き方ができていたことが明確である。また日本社会にはこうした女性の望む生き方に許容性があった。これはユダヤ・キリスト教の社会やイスラム教の社会では見られない。その背景には縄文や神話の時代からの天照大神を中心とする女神信仰や卑弥呼で代表される日本の母性社会の伝統がある。現代社会で先進諸国に比較して日本女性の管理職の割合が低いからと言って日本の女性解放が遅れているという結論を出すのは短絡過ぎる。大事なことは女性が望む生き方に対する社会の許容性があるかどうかだ。例えば、日本では主婦としての選択は恥ずかしいことではないし主婦という言葉になら差別的ニュアンスはないが、英語の house wife という言葉には他に何も出来ない女性、或は incompetent woman というニュアンスがある。為にアメリカ女性は I am a house wife とは言わず、わざわざ I stay at home という表現を使う。そのことで、自分の意志で家庭に留まっていることを表している。米国では女性の社会進出の結果、逆に女性の中に格差社会を生んでしまっている。こうした社会的背景や歴史の全くことなる欧米からの批判にいちいち答える必要はない。逆に日本では如何に素晴らしい女性の活躍の歴史が有るかをこちらから発信すべきであろう。

本稿は筆者が定年後、神戸女子大学の行吉哉女理事長の依頼で担当していた「女性の為の幸福論」の講義をもとにしたものである。

(通信 昭和 32 年卒 34 年修士)